

# ねえ、誰か教えてあげて

—— おせっかいのすすめ ——

永野　むつみ

お招きがあればどこへでもでかける劇団だから、長距離列車に乗ることが多い。本を読んだり、手紙を書いたり、居眠りをしたりと列車の中は私の書斎だ。けっこう気に入っている。しかしこのところ席をとるのに煙をとるか、<sup>子ども</sup>をとるかども<sup>を</sup>をとるかど悩む。タバコを吸わない私は、一車<sup>は</sup>輛<sup>分</sup>まるまると紫煙に包まれた席は乗り物酔いを誘い、居眠りもままならない。かといって禁煙車は、とくに休日前後に

乗る場合はちょっとした覚悟が必要だ。とにかく子どもがいるとうるさい。泣く、騒ぐ、声高に話す（これは子どもに限らないが）、車内を走り回る。親は、と見るとたい同行者と熱心に語り合っているか、ぐっすりお休みになっている。これに腹が立つ。毎日の子育てで疲れているんだろうなあという思いも一瞬よぎるが、こっちだって眠りたいのにという悔しさが腹立ちに拍車をかける。車内を走り

回る子どもを呼び止めて「走らないでね」程度の注意は私にでもできるが、それ以上はむずかしい。なぜならこれは、子どもというよりおとなの問題だと考えるから。

先日も新幹線の中でこんなことがあった。

私の後ろに座った四、五歳の男の子が足のせ台をボタンボタンと起こしたり倒したりして遊んでいた。しばらくしたらあきるだろうとがまんをしていたがなかなか止まない。その度に私の座席もゆれる。頭の下のカバーもいじり始めたので「止めようね」と声をかけた。一度、二度。それでも止める様子がないので少し声を荒らげて「止めようね」と私。「○○ちゃん、止めなさい」ようやく男の子の隣に座っていた母親がたしなめた。並んで座っている子どもに注意するにしている思いがけず大きな声で、周囲の視線がむしろ私に集まったように感じら

れて気恥かしい気がした。しばらくして男の子はガラス窓をたたき始めた。あきると通路へ出てウロウロし、自動ドアを開けたり閉めたり。しだいにスピードも出て走り回るといふ様子。何人かのおとなに不快な表情が生まれた。「危ない、転ぶよ」言葉と手をかけるおばさんも一人、二人。時おり母親が思いついたように「○○ちゃん、じっとしていなさい」とか「○○ちゃん、座りなさい」と座ったままで、首だけ動かして大声で言う。周囲のほとんどの人が目覚めてしまったよう。母親の声の方がよほど騒々しい。本気で座らせたいのならそばまで近寄って行き、男の子に聞こえるだけの声の量で注意すればいいのだし、連れ戻せばいい。私はじりじりする。案の定、男の子には母親の言葉が届いていないとは言いがたい。落ち着いて座る様子は一向になかった。ついに私の隣の紳士が「静かにしろ」と怒鳴った。その声は男の子と母親と、なぜか私にも向

けられたような気がした。すると母親が突然立ち上がった。「パパ、○○ちゃんがうるさいの」とまた大声。あら父親もいたんだと思ったとたん、少し離れた席から立った男性が男の子の腕を引っばって来て、私たちの座席のまえに立たせた。「○○、ゴメンナサイってあやまれ」と怒鳴り、頭をゲンコでなぐった。男の子はワッと泣き出した。隣の紳士は、と見ると眠ったふりをしている。「あ・あ・そんな……」とあわてる私。「ゴメンナサイって言えって言ってるんだろ」とまた一発。かわいそうな男の子。「大丈夫、もう静かにできるよね、ね」となぐさめるしかない。私が言い出さなければ少なくともぶたれずには済んだのかしら。どうしてこんなことに……。

父親によって力づくで自分の席へ押し込まれた男の子にくだんの母親が、「アンタのせいよ。ああ恥かしい」と一言。

子ども、とりわけ幼児にとって、長距離列車での移動は必ずしも快適ではない。開かない窓、おとな用の座席、何時間もおとなしくしているというのは土台無理な注文だ。じっとしていられないところに子どもの子どもらしさがあり、育ちへのエネルギーがかくされている。じっとしていられる子どもがいたらかえって心配だ。この「あたり前のこと」から出発したい。本を読むとか、あやとりをするとか、人形で遊ぶとか、しりとり、なぞなぞ、盤ゲーム、カード、折り紙、お絵描き、お話などなど、子どもの退屈をまぎらすための工夫と準備が欲しい。何の準備もしないまま乗り込んで子どもに静かにしている



なんていうのはほとんどいじめに近い。おとなとしての知恵が求められているのだ。幸いなことにおとも昔は子どもだったのだから、少しは思いつくはず。枯渴してしまっているのなら、それこそ子どもと相談すればいい。列車の中で何をして遊ぼうか、

狭い座席でどんなことならできるのか。車内には疲れていて眠りたい人もいるだろうし気分の悪い人もいるかも知れない。もしかすると自分と同じ様に屈している人、大切な人が病気になるってそのお見舞いに行く途中の人もいるかも知れない。列車の中にはいろんな人がいるのだ。その人たちにも少し思いをはせて、でも一方的にがまんを強いるのではない。自分も楽しくて、そして周囲の人にもできるだけ迷惑にならないようなすこし方はないかと考える。どんなおもちやを持って行くかと考える。子どもにとっては自分自身のことだもの、一所懸命考えた方がいい。ものを考えるとはこういふことだと私

は思う。少しおおげさかも知れないが、おもちやを自分で選ばせることは子どもを「ただ連れて行かれる人」から旅行の主体者にする一歩にもなるのではないか。

ただ乳幼児の場合は、もちろんこうはいかない。

第一、相談などということ自体が成り立たないだろうし、「泣く子と地頭にはかてない」のだから。赤ちゃんが泣いたらとにかく抱き上げてあやそう。それでも泣き止まなかったらちよつと歩いて、デッキに出て気分を変えてやる。この空間なら歌も歌ってやれる。「泣くのは止めなさい」「他の人にご迷惑ですよ」、くれぐれも交通違反をとがめるおまわりさんの様なポーズで赤ちゃんを説得しようとするのは止めて欲しい。声かけより抱きとめること、説得よりだまし、あやしが必要だ。彼らはそれを求めて泣いている。そのことに気がつかない親がこのところ

増えている気がしてならない。実はかく言う私も長男を育てているときはその気のある母親だった。言葉で子どもを育てていたような気がする。相手が「赤ちゃん」なのだということをつかり忘れていた。初めての子どもの場合、彼が一歳ということとは親の方も、親になって一年ということ。やることなすことが生まれて初めてのこと。だから、失敗も勘違いも命にかかわらない限りやむを得ないと言うしかない。それでもなんとか無事に子どもが育つのはどの親も、決してひとりでは子育てをしていないということだろう。影響しあい支えあい、親として育ち合っている。私はこのことがとても大切なことだと今、やっぱり思う。

このあいだ、私の人形劇団の上演中に赤ちゃんがぐずり出した。なかなか泣き止まない。外へいったん連れ出せばいいのにな々と、演技の途中、途中で

思う。どうも子育て中の親は、我が子の泣き声に鈍感になるらしい。だからこそ子育てができるとも言えるが。誰か忠告してあげればいいのに……、やるせない気分がつのってくる。すると突然、プーア、プーア。その母親は音の出るおもちゃで赤ちゃんをあやし始めてしまった。アチャア。

ねえ、お願い。それはイケナイコトだと、誰か教えてあげて！

(人形劇団ひばりあむ)

